研究フォーラム

民博の北方先住民コレクションの再検討

齋藤 玲子（さいとう れいこ）
民博 民族文化研究部

民博の収蔵品のなかには、他施設から引き継いだ旧蔵資料が多数存在している。
それらの再検討は、資料情報のよりいっそうの充実をめざすことに加え、その資料が収集された背景や研究の状況をつまびらかにしていく作業でもある。

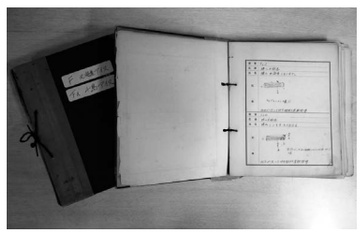
研究の目的

民博には、アイヌ民族の生活用具や儀礼具などの標本資料が四〇〇〇件以上収蔵されている。赴任してからの一年あまり、二〇一二年の特別展「千島・樺太・北海道　アイヌのくらし」の資料リスト作成に始まり、展示解説や執筆にあたって、何度となく標本資料データベースを利用した。そのたびにあらたな発見もあるが、情報不足や誤りを残念に思うこともあった。逐次、情報を追加・修正してゆくことはできるが、ひとまとまりのコレクションとして検証するほうが効率的で、適切な評価ができると思われた。

そこで、本館が所蔵するアイヌ、ウイルタ、ニヴフの標本資料のうち、明治から終戦までに収集されたものを再検討するための共同研究を、二〇一二年一〇月からスタートさせた。第一の目的は、これらの資料に関する情報をより正確なものにすることにある。しかし、それだけにとどまらず、各民族の物質文化、言語、博物館資料管理等の専門家が共同で研究をすすめ、人類学または民族学者と被調査者・資料提供者との関係など、資料が集められた当時の研究状況と社会的な背景をも明らかにしたいと考えている。

研究の背景

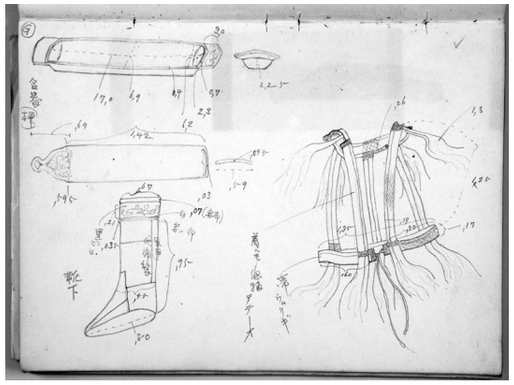
本館所蔵の北海道、樺太、千島の民族資料のうち、第二次世界大戦終戦までに収集されたのは、アイヌのものが一〇〇〇点以上、ウイルタが二八〇点以上、ニヴフは七〇点以上と推定される。ウイルタとニヴフはサハリンの先住民で、日本がサハリンの北緯五〇度以南を領有していた一九〇五（明治三八）年から一九四五（昭和二〇）年のあいだにおもな調査・収集がおこなわれた。千島においても、一八七五（明治八）年の樺太千島交換条約以降に調査・収集がおこなわれた。アイヌの資料は三地域すべてにわたっている。現在では収集できない貴重なものが多数含まれており、伝統的な特徴をよく残しているため、物質文化の研究を進めるうえで極めて重要である。


東京大学旧蔵資料のうち北海道、千島、樺太の目録

データの見直しと情報の追加

民博が開館する前に収集されたこれら資料の大部分は、東京大学理学部人類学教室と、アチック・ミューゼアムから資料を引き継いだ日本民族学会附属民族学博物館（後に文部省史料館に寄付）の旧蔵資料である。この二大コレクションは、十分ではないものの、資料の台帳やカードが付されており、番号、資料名、収集地、収集者、収集年月などの情報が記載されているものもある。収集者が明らかな資料は、調査報告をはじめ、当時の新聞や雑誌、また近年になって発見あるいは公開されるようになった研究者の日記やフィールドノートなどから、詳細な情報が判明するケースも少なくないと考えられる。

たとえば、東大人類学教室の講師で、東京人類学会誌の編集をおこなっていた石田（いしだ）収蔵（しゅうぞう）（一八七九―一九四〇）の遺品は、板橋区立郷土資料館が所蔵しており、その中に民具のスケッチとともに民族名や資料名が記されたノートがある。民博の東大旧蔵資料の北海道アイヌのクマ送り用祭壇模型は、経年による傷みもあり、組み立てられずにバラバラになっていたが、石田ノートの記載から名称と構成がわかり、二〇一一年の特別展で復元展示することができた。アチック・ミューゼアムの旧蔵資料にも石田が収集したものがあり、削りかけで作られた胴衣はどの民族のものか不明となっていたが、ノートにはニヴフであることが記されていた（しかし名称はウイルタ語であり検証が必要）。共同研究のメンバーには、板橋区立郷土資料館の館長に加わっていただいており、石田資料の解析をさらに進めたいと考えている。


石田収蔵のノート。左上の⑥はニヴフの当時の呼称「ギリヤーク」をあらわす（板橋区立郷土資料館提供）

胴衣（標本番号 H0025587）
ヤナギなどの木を薄く削ったものはさまざまな儀礼具に用いられる。その削りかけを編んで作られたシャマンの胴衣

民族学研究と北方先住民

個別の収集時の状況をみてゆくと、生活の変化で不要になったために簡単に譲ってもらえた民具もあれば、お金のために手放した儀礼具や、移住によって無人になった集落の倉から持ち出されたものなど、さまざまである。こうした情報も資料の理解には欠かせない。

また、収集の全体的な傾向は、当時の人類学・民族学の潮流を表したものといえるだろう。日本人の起源の探究、周囲の民族との文化的比較、あらたな領有地の資源とその活用――など、この時代の日本国家と日本社会がアイヌやウイルタ、ニヴフといった北方の民族をどのように見ていたかを示していると考えられる。

今秋の特別展ではアチック・ミューゼアムの資料を展示する予定であり、平成二七年度には本館展示のアイヌ文化と中央・北アジアの新構築が予定されている。かつて隣人から収集されたこれらの資料をどのように展示し、いかに受け継いでゆけばよいのか。そのヒントを見つけるべく、共同研究をすすめていきたいと思っている。

共同研究
「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動――国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料の再検討」
代表：齋藤玲子
2012年10月～2016年3月